

石川伍一日記を読む（四）

大里 浩秋

まえがき

ここに載せる石川伍一日記の解読文は、本誌第一九一号、一九二号、一九三号に掲載した文の続きに当る。石川伍一の経歴については、第一九一号に簡単に紹介し、さらに詳しくは第一三五号に「石川伍一のこと」を發表しているのので、参照していただきたい。

解読文は、原文中のカタカナはひらがなにし、人名を除く漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を付している。また、「」によって文字の不足や不明な点を補ったところがあり、原文中に数字分の空白がある箇所は、その通りに空白にした。解読できなかった文字は、一字分を□一個で示した。解読に際して、今回も常民文化研究所田上繁教授の援助をいただき、おかげで解読不明の文字をだいたい減らすことが出来た。

当初の心づもりでは今回で解読文の掲載を終えるはずだったが、準備の都合で次号を期すことになったことをお断りする。

明治十九年七月から八月の日記

七月日記

一日 晴 木

午前島氏を訪ふて書を西氏に送り予を薦挙するを請ふ。氏諾し明日送るを約して帰る。郵便〔船〕横浜丸来る。此日より夜肆を開く。

二日 前曇、下雨 金

三日 前曇、下小雨 土

書を西氏に送り自薦す。予か性質、志向、履歴等を云ふ。此夕小笠原氏を訪ふ。北京澤村氏より信来れり、通信会のことを言ふ。荒賀君の所に談話す。

四日 曇、晴 日

午前横浜丸にて来りし会津の人木村、望月両氏を吉島に訪ふ、在らず。乃ち河野氏之室に話す。又山ノ内を訪ひ閑談数刻、氏曰く、予は腕力者流の雲を捉へ風を捕ふる如き者を好まず、予は只権力は金力に帰するの金言を信す、故に金力を養成するを務むへし、之を成すに航海者とならん、此の如くにして事有るに臨ては敵の糧を途に奪ひ或は虚に乗し内浦外洋跋扈せざるなく、充分に金力を有せは国家の事に於て為さんと欲することを為し得へし、且つ腕力者流は只に目前のみに注意せり、凡そ大事を思ひ立に少くも十年の日子を費すへし、其内に清国の

形勢如何に變すへきかを計らざるは愚なり云々。氏は父贏□十弟なりて爲めに少しく意を勞せり。予思ふに、充分の財を得るに日を費せは予等か志す所の業の機を失ふべし。此事両立する実に難し。故に此兩者を合し相連合して後万全を期すへし。已むなくんは富豪に取る何そ不可ならん。夫れ然り、山ノ内氏は時を得は壓墊する者に非ざる也。

三日の続

通信を開くの説に、有志者の事業を爲す一個人独立して爲し得へき者に非ず、故に事を爲すの方法を異にし、又は説の大同小異に因て相分離するは志士の爲めに取らざる所、宜しく結合一致せざるべからず云々。而るに此事行はるへき模様なし。思ふに、氏は多くの同盟党を有せず北京に在り事情を詳かにする能はざるに起しものならんか。

五日 晴、暑太甚、六時頃驟雨 月

午後望月氏及木村氏を訪ふ。望月氏は才略あり。

氏は黒田内閣顧問の西伯利亚行を評して無用の遊歴となせり。若し候〔侯〕をして魯国東洋攻略を知らんとせば、甘肅、四川よりトルキスタン、アフガニスタンを経てコンスタンチノープルに出つへし、而るに此路は危険なれば少人にては通り難かるへし、今此を棄て、曾て華族すら旅行したる西伯利亚の漠地流人の中を歴遊す、候〔侯〕平生の氣質に似ず、候〔侯〕の爲めに取らざる所なり云々。此評当を得たり〔と〕謂ふへし。

氏問ふて曰く、予君の志を問はざるべく、又予か志を言はざるべし、而るに今清に志あるものあれば、必ず一方に起らば一鎮を倒す如きことは易事のみ、而るに此の如きことはなさし、或は四川の強氏と富族に拠り、福

州の慷慨の士を用ひ、天津、上海、南京、広東の地に基を立つべし。予曰く然り。氏又曰く、之を成すに金を要す、金を出すに商か工か又内地の豪傑に説くべきか。予曰く、商工皆資を要す、且つ風俗時好を知らざるべからず、先つ商なるへしと答へたり。談未だ尽きずして別る。宗方氏を訪ふて新紙を借り赤穂忠臣内伝鏡を貸す。帰途驟雨に会す。小笠原氏に寄る。

凡そ日本より来る者は氣宇大に計画規模宏なり。予等の如き屢々衣食に「の」為めに役せられ意志不伸、又群鷲囁々の中に在り、徒に時と日を消すこと多し、可悲哉。而るに是れ予か罪なり、自ら戒めずんはあるへからず。此夜牟田氏に送るの信を草す。澤村氏のこと、望月の話、山ノ内のこと、白井及東京のこと、予かこと等なり。又彼地之種々に付て問ふ。

六日 晴 火

牟田氏に送るの信を木村氏に托す。

七日 晴 水

郵船横浜丸三時出港、東京丸入港。此夕木村氏富有号に乘し福州に至らんとす。送て船に至る。留別として聚豊園に支那料理の饗あり、会者望月、松木、山下、吉島と予なり。十一時過ぎに至る。又船に至り、別を告げて帰る。

八日 炎暑如焼 木

下痢の為めに苦しむ。望月來訪せらる。此日一日横臥。

九日 同前日 金

風邪に犯されたるを覚ゆ。小田切天津より来信、来津の事を云ふ。

十日 ヶ

午下嶋氏を訪ふ、在らず。小笠原に至る。此夜望月氏と逍遙、松尾に茶を飲む。氏の処に至り談話。

十一日 ヶ

前又島氏に面し芝罘よりの返答を問ふに未たし。乃ち望月氏を訪ふ。閑談数刻、佳人奇遇数冊机上に散せり、乃ち取て其慷慨憤の詩を抽し予に示し共に読む。此書は氏の叔氏芝君の著す所にして、氏は米国に在て遊学七年深く杞憂を東洋に抱き、清、西班牙、波蘭人を仮て以て其感情の情を述へし者と云ふ。氏は社会学及 学両学士の譽を受け(学費は岩崎氏弁せんと云)、帰朝の後専ら三菱の顧問と為り屢々召徴を蒙れとも曾て応せず、近々谷氏に勧め歐行せしめて自ら随従せしと。

又氏は会津の豪傑長岡氏の事を語る。長岡氏は前原奥平をして西陸に起らしめ、前原より熊本神風連に氣脈を通し、神風連より逸見等に通せりと、而して自らは佐倉分営を一聯隊奪ひ(分営長及隊長、参謀等は曾て其党たりしと)、宇都宮分営一聯隊をも併せ(分営にも其党ありし、秋田より仙台鎮台を圧せしめ、越後は遠藤なる人ありて其地に起らんとせり。遠藤は藤原の末流にして其地に流され、新田数千町を拓き素封、曾て諸侯に隸属せざりしと云ふ。謀熟し將に会津落城の日 月 日を以て事を発せんとし、其期に至り同志十数人墨田川より船佐倉に至らんと思案橋に至るに、巡吏の怪む所となり、衆之を破り通り抜けんと健闘す。其内長岡も亦傷を蒙りたれ〔ど〕も一方を破り舟に乘し墨田川に出つれば、兩岸皆人快舟を以て追ふ。逃る可からざるを知り曰く、事を創する始より死を期す。今事破る天なりと。乃ち敵せざるを言へとも畏れて近かず。刃を棄て初めて捕へしと云。

後幾くなくして長岡は獄中に死せり、三十余歳と云ふ。木村信次君も亦同志にして思案橋にて奮闘、思らく死は何時にても出来へし、逃る、丈は逃れて後図を計らんと舟に乘し墨田川を溯り千平に至り逃れ、長岡氏の伝に就□て聞く。假令事露はるゝとも、此の如き計画したること一敗を以て画餅なすへけんや。且つ地方未だ尽く露はるゝべからず。越後は抛て以て事を挙ぐるに足れりと。夜行昼伏新潟に至り深笠を戴き道路を徘徊するに、遠藤氏已に伝に就くを聞く。時々巡吏笠内を窺ふ。氏已に成すべからざるを知り曰く、我は木村信次なり、伝せられよ。是より先き氏等の姿絵諸方に遍かりしと云ふ。是より先き警部等身を奴僕に　し長岡の宅を窺ひしも知る所となり、而るも氏の書生二名反心する者あり事大に泄れしと云ふ。山川氏も氏の党なりしと。而る「に」山川は已に事の成る可からざるを未発に察し其党を脱せんと。因て此時山川に属する者多かりしとなん　て前原も露見し神風連のみは未だ知れずして鎮台を襲ひ長官を殺したるも事遂げず。

木村氏は長く獄内の内に在り、出て、清地に來るに先「立」ち写真術を学ひ、此を以て一個の基を福州に建てんとて発せるなり。

十二日　月

此夜家に在り、戸を開き窓を放ち涼を入れ蚊帳の内に横になりて書を見居たりしに、何時の間にか窃盜ありて我か此頃求めたる鞋子を盗み去れり。予は久しく剃頭せざるにより浪人の月代とも云ふへきに此の炎天の日に帽子をも戴き居れば、人に怪みて間々何故に帽子を被り居るやなど問はれ困ること往々あり（此れは支那人は常に剃頭し夏になれば帽子を戴かざる風習なればなり）、予か髪も随分長くなりて弁子に結び付けらるれとも、二、三日にて直に壞るゝなり。而るに予は此の度々の剃頭料をも弁せざるに此度の事は泣面に蜂とも云ふへきか。

十三日 火

此夕望月氏を訪ふ、在らず。依り「て」小笠原氏に至り談話。

十四日 水 晴

此夕仏国革命の日に当り仏租界は燈光天を輝かしたれとも、雨ふりて遺憾にも見るを果ささりし。

十五日 木 晴

此日九時東京丸解纜、齒医西村氏及瀧、加藤の両生帰校の途に就く。五十錢金を給せらる。邦山氏吉島に移る。

此日島氏を訪ひ回書の事を問ふに、西氏より予に送るの一通あり開き見るに、花坂氏の言間違に出てなるならん、此方にて入用なし云々。邦山氏を訪ひ此夕望月氏を訪はんとせしに、途に氏及宗方、荒賀、島津及木脇諸氏に会す。何れに之くを問ふ。曰く同芳に茶を飲まんとすと。今將に子を誘はん「と」せしに幸に此に遇ふ、共に興々すべしと。乃ち之く。蓮子羔、杏仁茶を飲む。甘飴言ふ可からず。十一時頃帰家。家弟より信至る。内に畠山氏の信を包む。氏か祖父、老母の遠逝を告ぐ。

十六日 金 晴

此日嶋氏を訪「ね」序に小笠原氏及荒賀氏に至り、帰路望月氏に寄り帰家。復た望月氏を訪ふ。松木氏在焉、仏の談話を成し有たりし。旧友吉田清揚氏来訪せらる。氏は樂善堂に寓せり。

十七日 土 晴

此朝望月氏を訪ふ未起、乃ち宗方氏を問ふて談話午下三点鐘に至る。互に打ち解け人を評し快大「に」甚し。

此夕岸田氏を訪て、予か貴店に人多きに強て煩はずに忍ひす、天津に行かんと欲す、願くは少の旅資を貸与せら

れよと。氏話を転して曰く、書肆の一人杭州に赴き未だ不帰、暫可在即処。予は乃ち書を小田切に寄せ旅資を得ることに決せり。

帰路望月氏に寄り懇話数刻、中野及白井氏分派之事、及東、白井両氏の評、又芝氏兄弟五人、岡本氏生来居止異常なるへし、氏等か創業の方法及守成の法制、爆烈「裂」弾の事。

十八日 日 晴

此より先小笠原氏より招れたるを以て行く。此朝丁度主人始め店掃除をなせにしも閑せず外出せり。素麴の馳走を受く。午下宗方、荒賀二氏と望月氏を訪ひ、共に浦東に遊ぶ。閑静にして清風俗塵を洗ひ寂に清涼之気人を襲ひ、況んや不凡の英士と共に楽しみ大に正志を愉ましめたり。一瓶の威兒米酒と一包の□阿糕とを齎られ、酒を飲み糕を食ひ、飽酔交至る。各横臥或は書を読み夕日更に至り、此処に飯せんことを計る。且つ何処にか鶏を得んと宗、望二氏、予と新船渠の傍の村落に求む。村人二氏を見て高価を貪る。乃ち予独り一村落入り奔走遂に一羽を三十錢に得て帰り自ら料理し（極て不規則）自（ら）煮て漸く食ふを得たり。而るに衆酔飽の為めに快食せさりし方惜し。宿主人懇切に饗し素麴等を出せり。之か為めに礼として一元を給せり。費皆な望月氏に出つ。夜月を踏て帰る。黄口にて氷を呑み荒賀氏に至り息ひ、十一時帰家。

十九日 月 晴

此朝店主人種氏予をして去らんことを求め曰く、始め曾根氏の子を托する、岸田氏着申迄の約束なり。此れ信義の事にして其後遷延今日に及ふ、我か父をして知らしめば予か迷惑なり云々。此の原因は予か此頃外遊すると近日客少く用なきに基く者なり。乃ち小笠原氏を訪ふ。氏は宿酔の為めに困めり。氏予をして来り共に宿すること

を勧む。予は氏を煩すを以て辞し岸田に入るを決す。此夜二たひ岸田を訪ふて遂に面するを得ず。

二十日 火 晴

朝九時岸田氏を訪ふて面晤暫時の寄食を託す。氏予をして書肆に在らしむ。店内に在る者、濱、島田、小山(二氏は画を学ひ店に多く關係を有せざるか如し)三人にして、支那番頭三人、小僧三人、正誤老先生一名、印刷者三名及賄也。番頭は売及帳を司る。日本人は之を監督し不正のことなからしむるなり。予等樓上に寝す。樓上印刷場あり。予は此日より此に移ることに決し晝食して運搬の為に外出す。錦芝洋行に至るに主人在らず、乃ち家に行き妻氏に辞し、望月氏を訪ふ。福州より書至れりと云ふ。天津行を止めて福州に赴かんかなと云居れり。又中野、鈴木両氏は築地に在る寧波人某に就て寧波語を学ひ居るも、二氏等は僧学を学ひ僧となる計なり。河野氏に面し岸田に移るを告げ、邦山氏に至り金子より出されて暫く岸田に在り天津に行かんとする旨を云ふ。氏は予の天津行を惜んで曰く、予をして早く知らしめば如何にか世話すべし、來年我旅行するに必ず子を携へんと欲す、而るに今如何ともすべきなし、天津より返信若し好音なりしば予必ず世話せん云々。尋て小笠原氏を訪ふ。氏は病未た全く癒へず。東京より送來たる菓子を饗せらる。帰路長尾之処に至り綿衣一領及竹籠を貰來る。是より先き予は羊毛皮の褂子を住宅の方に持て行きして、此頃之を尋ねしも見へず。

予は此度錦芝洋行を出てたるに付て該店売買上の事得失如何を記するは必要なことなるべし。資本金は幾何なるやを知る能はずと雖も、肆内の品価合計三、四千元なるべし。曾て一西人あり店を挙て五千元に買はんと言ひしに、主人は七千元に非されば売らずと。而るに五千元にても充分利益ある由なり。凡て時好に適したる品は元価の二倍或は三倍にして、旧なるに及て漸く其価を減するなり。聞く十年以前の物もありと。此の如きは只々店肆

を充たすのみ。此の店の尤も意を注ぐべきは時好に投するにあり。意匠の奇工造の妙なるものを選ふべし。薩摩の古陶及尾州の新器、金色燦爛其画の密にして麗なるを愛す。薩は大皿の額に供する者及花瓶に適し、尾は茶道具及皿又花瓶に好し。九谷は次き有田は劣る。銅器は多〔く〕花瓶なり。着色尤も佳而し退色の憂あり。又銅線を編み竹に擬したる、雜種形の花瓶小箱及巻烟立其他小器、象牙細工は精緻真に近し。価値ならず。鉄額及木額〔に〕巧に象牙、鹿角、貝殻を嵌め花鳥を画したる者、又絹手中、布団等縹子地に花鳥を縫入せしの如き掛物〔は〕精巧美麗真に逼る。外漆器及種々数ふ可からず。買人に対しては尤も意を用て款待其欲を買ふべし。品物を送るに約に違はず速にすべし。又名声を売るに新聞に広告に、其他名を顕は〔す〕べきものは之をなさ〔ざ〕るなかるべし。

錦芝洋行は父子相和せざるか如き有様あり、父は横浜より送るに一割の口銭を取り、子は時に適すへき者を郵船のボーイに托し其店に自分の商売を営むか如きは不足の事なり。而るに時好を拵ふ如きは少く意を注ぎ居る如し。只買人を待する大に粗にして為めに大に其歡心を害し、今や名望と信用を失ひ、或る夫人の如きは主人に対して此店は永く存立するを得ずと言ひしとか。目前の小利に汲々として永遠の大益を思はず、一文惜みの百文失ひの如く、新聞紙等に名声を広むるの益を知らず。又自ら其分に安じ外に願ふ所なきか如く益々其業を拡充するに意なく、其内費を省くに汲々として一小不利の事をなせば反眼して怒り、誠に此の如き店にして、此の小器にては行末寧ろ大なる能はず、縮むこと鏡に掛けて見る如し。斯る人の習として己れに優りたる人を容る、能はず。雇人の如きは学文あるもの一人もなく、唯々黙々只命是に従ふのみなれば、其失を聞て改むるなど云ふことなし。金銭に吝にして雇人を籠絡せんとすれば、雇人は主人に服せず内に不平を鳴すあり。為に鞠躬の節を致すものなし。

誠に惜むべく、慨すへし。

店は一日に平均に二十五元より三十□位の商買あり。而る〔に〕暑に入る。以来来客少く大に其額を減せしなるべし。

若し一人あり一の雜貨店を此地に開かば錦芝洋行の信用を失ひ、藤井の未だ大ならざるに乗せは大に利を博すべしと愚考せり。

二十一日 水 晴

此夜小笠原氏を訪ふ。荒賀氏明日島津、木脇、税所三氏と浦東に遊はんとすと予を誘ふ。予之を辞す。荒賀氏之処にレモンを飲む。

二十二日 木 朝雨、午霽

此夜吉田氏と島津氏を訪ふ。宗方氏在焉。

二十三日 金 晴

此日下痢にて一日横臥。夕吉田氏と散歩。

二十四日 土 晴

青山芳得氏よりの書を領す。天津より送る。

二十五日 日 晴

午下望月氏〔を〕訪ふて快談。小笠原、荒賀諸氏の寓に至る。宗方、□川在り、予か来るを見て金米糖を出し、攻むる百五十を喫するを以てす。乃ち之を喫し了〔り〕飯を食ひ、食後宗方、小笠原二氏と散歩を花園序に予の

寓に来る。山本予に告げて曰く、佐々木氏来り予を訪へりと。予乃ち二氏と佐々木氏を金子に訪ふ。変事なし積氏より予を携ふることを托されたり云々。

二十六日 月 炎

此夕又た佐々木氏を訪ふ。

二十七日 火 々

此日邦山氏に面し佐々木氏来申積氏より予を帶來するを託せら〔れ〕たりしことを告げ、予か天津行せざる可からざる所以を言ふ。又望月、荒賀、島津、宗方諸氏に此のことを告ぐ。

牟田より信達す。畠山忠朗氏に送信し、其祖父、老母の死を弔し、又目下我党有志者の形勢を述ふ。

佐々木氏を訪ふ。商業の事を話し話遂に故郷の事に及ふ。毛氈買売を托せらる。

此夕画家小山松溪氏帰国。

二十八日 水 々

家郷に送る信を草す。此日吉島を訪ふて佐々木毛氈の事を談す。邦山氏の処に話し晚餐の饗に預る。佐々木氏に寄り絨氈の事を告げ、共に公園に遊ぶ。巡吏呵す。弁解して入る。

二十九日 木 々

盛田、片岸及種市に送るの書を草す。片岸の信には先づ久闊を述べ、平素の安否、予の□□に及び、亜州隣人のこと、清国のこと、異邦の覇客、古国農工の興らざるを慨するも国人の恬たること等、米内へは平素を陳へ、田舎、都の諺、唐土之事に付て云々。

三十日 金 小雨

青山氏に答ふるの信及舎弟への書を草す。

三十一日 土 曇

此夕小笠原氏を訪ふ。共に佐々木氏之錦芝洋行の寓に至る。

岸田書房及び薬店共に可成の売高なり。而れとも店内規律なく十有余人の日本人、八、九人の支那人を使へとも、事務却て挙げらず。薬店は二、三人、書房は四、五人に〔て〕事足るべし。翁も改革せざるべからざるを知れとも、因循姑息決断に乏し。

八月日記

一日 日 夕大雨

此日小笠原氏の所に至る。曾て佐々木氏の晚餐の饗を受たる約束あるを以て共に行く。西川氏伴焉、錦芝洋行に至る。佐氏不在、乃遊西花園、天驟漲黒雨将大至急復訪佐氏、須臾而大雨如流車軸凡半点鐘而止。道路為川、上車至四馬路海天春。

二日 月

午下吉田氏と共に税所氏を中西書院に訪ふ、不在乃ち望月氏の所に至る。荒賀氏在焉。復共に荒賀氏の寓に赴く。小笠原氏の室に夕饌を喫し、望月氏来り談話十一時に至り乃ち帰る。至れば小 告げて曰く、此日佐々木氏予

を訪四度今夕正さに上船天津に行かんとすと。予其急なるに驚く、乃ち錦芝洋行に至る。佐々木在らず、待つ須臾にして至る。予氏に告げ少く此行を緩ふせんと欲し明日を以て発せんことを言ふ。而るに氏聞かず、遂に此行を決す。依て帰て岸田氏に面し厚情を謝し、急に行季を装し行を同窓に告げ発す。夜更人定、而るに曾て邦山氏に行を告ぐるを約するを以て其寢を犯し氏に辞す。氏亦其急なるに愕き予か為めに二元を贖す。望月氏に辞し、小笠原、荒賀、島津諸氏に別を告ぐ。小、荒二氏送て船に至る。小氏予に菓子を送らる。佐々木氏前に船に至る。此行や意外に出て遂に予をして前数日草する所の書信を送るの暇なからしめたり。且つ親友諸子に別を告ぐるに時あらざりし、予佐氏か何故に如此急卒なるかを窃に疑へり。

三日

早朝夢裡に発す。予か天津航海記は前二回に詳かに記せるを以て此回は之れを記すの勞を取らざりし。

五日 曇、或「は」雨或「は」晴

四時頃芝罘に着す。佐氏上陸、予留る。白須及佐埜二氏至る。先つ久闊を叙し、談頻りに上海故友の事に及び稍旅情を慰めり。氏等曰く、幸便に托して天津に遊はんと。十二時半出帆。

六日 半晴 八十二度

七時頃太沽に着す。直に南砦の前を過く。黄泥壁壘巖然たり。北砦を過るに一所の修築を為すあり。予思らく、東洋第一の堅壘とも称せらるゝものなれば定めて中間は鉄或は石ならんと之を見れば土のみ、灰土の如し。溯りてターチャーヤヲに至る。船停て動かず。時十二時過なり、佐氏行を急ぎ直に上陸馬に乗しつ去る。予は船を雇ひ行李を運び、順風に帆を張り漸く紫竹林碼頭に至る、蓋し三十余里と云ふ。直に上り領事館に至る。佐々木氏

を訪ふに氏は天津に上れりと。小田切氏に会し其厚意を謝し、鄭氏に無音を序し、佐氏帰る、曰く伍廷芳を訪ひ材木の車漸く定ると。此に於て始めて知る、氏の偶然として上海に至り急遽旅程に上りしを。蓋し鉄道敷木二万本を売りしと云ふ。積氏の至るに遭ひ面して此度の礼意を述べ以後を托す。種々の話あり、中に清軍二万余海光寺門の外広原に簡閲したる其盛況が弊を言ひ、又日本鉄道中仙道を廢し東海道に移架することに付て云々。此日積氏の宅に移る。此夜徳丸氏来り当地商買「売」のこと、日本商人のことにて論せり。

積氏は先つ予を戒むるに、土日の外は遊ふべからざるを以てし、又一たひ志したる上は之を貫徹すべし、若し望まば海軍の方に世話すべし等云々せり。氏は寛優厚待、予を大に力を専らにすを得せしめたり。此夜蝨の為に寝る能はず。

七日 晴 八十七度 土

戴先生と会話。午下領事館に至り小氏及佐氏を訪ひ、豫氏の寓に至り久闊を叙す。又武藤を武齋号に訪ふて談話。帰路張先生を尋て清先生の事を托して還り、積氏と計り文先生に語を学ひ張先生に文学を学ぶことになしたり。夜佐氏来訪。

八日 晴 九十一度 日

此日積氏と馬に騎る。久しく乗らざるを以て蹬不定落んとする屢々なり。又心胸痛し。雨を以て直に帰る。此夜領事より温飽の饗を受く。領事□夫人、積、鄭、佐、小、徳、武、徳及予也。完り鬪牌を遊ぶ。

此夕雨降路泥濘不可歩。

九日 晴 月

午下佐々木氏来り予に税関に行くを托せらる。張氏を訪ひ明日より読書を始ることを約す。蓋し氏に就て詩文を学はんと欲せり。伊黎將軍金順死したるの諭令あり。李氏□。

十日 天気晴、夕大雨 火

此日より張氏に就き照会文、上奏文及詩を学ぶことを始めたり。蓋し詩は支那人と交際するの一助となさんか爲めに学ふ者にして、文は積氏の爲めに上奏文及び新聞等を解説せんか爲めなり。又夜積氏と共に文竹泉なる者に就き言語を学べり。此頃は何故にや心氣鬱々不楽、徵兵の爲め留学届をなさんとして張に照明書を写さしむ。張先生に行く途に雨に逢ひ全身爲めに湿る。

十四日

照明書出来したるを以て届書を以て出〔し〕たれとも、鄭氏未だ取〔り〕扱はさる故如何なる法則なるか一向不分、照明書法不要なる書換を命せらる。委細は武藤氏之を知るを以て行き訪ふ、不在、次日聞之。

十五日 晴 日

兩三日以前より佐々木氏は家を紫竹林に借り普請に取〔り〕掛れり。此日朝より行き幫弁す。午下搬去、家は大〔太〕沽路上にあり元と税関書記生が好みて城郭の形に模したるの由なれとも、一年余人の住むなきを以て大に荒敗、草は奔々危壁剥落瓦落雨漏殆と狐狸の棲なりしも、人工を施し之を修成すれば、亦た一の雅家なり。二房一樓屋下簷あり之を修補するに五十元許を費し、一月六元に賃せりと。此夜領事客を招く。予も伴焉。蓋四人。

十六日 終日雨 月

此より先き雨大に降り、河水漲潰浴河の難を被りし者少なかさりしと。此夜驟雨屢々降り加ふるに、此の一日の

長雨を以てすれば大に災害をなしたるなら〔ん〕。元来此地は平地原野、河床より低しと云ふ位なればなり。

十七日 晴 火

十八日 曇、夕大雨 水

夕暮大雨、盆を覆すか如く終夜不止。

十九日 雨 木

此日雨未だ霽まず。益々甚し。雨漏り壁潰る。予等宿する所は泥造支那家の頂好新築なるものなれとも未だ此を免れず。思ふに、天津太沽辺の土屋の壊倒せる者幾何ぞ。此日雨の爲め又た有事に因て課を欠く。煙台白須氏より万国史及字引を送り来る。清国より十隻の軍艦を琉球に派したる噂を日本より領事に聞合せたる由、当地にては未だ全く此等のことを聞かず。

二十日 晴 金

午前事ありて紫竹林に赴く。法租界西方一統に水溢れ、浩蕩其勢威実盛なり。

東三省電線総弁余 氏より霖雨潦水の爲めに吉林地方の架線の困難なることを李氏に稟告した旨時報に見ゆ。

北京地方、又南方も大雨水漲の由、領事李鴻章に謁し前件問合の一件を聞かんとせしに、李氏は長崎にある提督丁汝昌より日本巡查□軍艦水夫を□五名を殺し四十余名を傷けたりとの電報に接せしを以て大に怒り、此れ地方官の治理の好からざるに因る、中国の軍艦に不礼之如此、其意ならば戦を始むべしと、意気甚だ決したる模様なる由。領事は狼狽諸人に頼み方々に聞合せ、愈々戦をなす意なるかを伺ふ。

二十一日 土

此日積氏電信を送る。領事館よりも送れり。人或は前事を以て李氏は喧嘩を仕掛け琉球事件を再興せしむる計画なるへしなど云ふもあり。予は、此事は此の如き意を持ては清政府より正々堂々と談判すへし、此位のことには和好を破ることあるましく、又喧嘩を仕掛けて琉球事件を持出す如き拙策あるべからず、長崎事件にては到底琉球の口実にならざるなり。只に夫の事件は李氏の脳底に蔵して忘れざるべく、早晚事あるへしと思はる。日本の老練將校方も矢張到底は一戦を遂げざるべからずとの意見を持てる由。

或る人は此の事に付き羅豊録氏に問ひたるに、氏は充分の償金と謝罪状より日本より取り閉口せしむるなるべしと答へたりしとか。片山氏及北條鷗所北京より來着。

二十二日 日

此夕佐々木氏支那料理の饗を受く。

二十三日 月

此日日本より電報ありたる由、日本人は四人死し十九名傷きたり、正理証拠充分にあるとか、領事は直〔ちに〕李鴻章に面したる、此度は大に和らき温順平安なりしとか。

貞助氏の書至る。その兄死す、及徴兵の事。

二十四日 火

此夕北條氏の南下をするを以て吉田氏への書状を托す。中に小笠原氏に送る信、其内に片岸、種市に送る二通あり。此れは先月中に草たれとも未だ出す便あらざりし。

二十五日 水 晴、有雲

仏人ガレー氏の妾前房に来る。ガレーの日本語を善くするは、隣室に居て之を聴き分ち難き程なり。氏は維新の頃は榎本氏などと箱館に據て、又越後辺にもありたる由。其後公使書記となり、清仏起るに及び氏は清にあり、諸方に奔走尽力したれとも政府と論合はざるを以て官を辞し、此度は鉄道会社に聘せられ売込の爲め当地にあり。二十八日 雨 土

此日積氏大に予か懦弱を攻む。氏曰く、予は子を遇する厚し、金を投して呼び、師に就て学はしめ卓を同ふして食す。堂々鞠躬の節を致すへし。而るに不満の色ありて事を治めず、此れ何そや。予は此の如き人を要するなしと。予一言の以て答ふるなし。予は元と害鈍敢進勇爲の才なく、因循姑息の氣あり。常々自ら省するも改むる能はず、可悲哉。此日家郷に信を送る。此信は上海に在るの日に草したれとも、当地に來りて教師に就きたる故徴兵令の届をなすに手間取り遷引したるなり。貞助に信を送り其兄の死を弔す。安保氏の信を包む。

三十一日

此夜は晦日なるを以て勘定なすに二時頃に及びたり。

八月中

此月随分多事の月にて、兵卒船に上り、又々天津に來ることとなり、來後暫くの間は何故か心中悶し、世事に疎とくなりたるか如くなりし。繼て長崎事件起り皆な一驚を喫し、其後何分穩ならず。俄は朝鮮の或る港を艦船の碇泊所となさんか爲めに強談したるにより、李氏の援助を仰くに至り、張道憲、文侍郎の如きも其の爲めに派し、又旅順より提督宋慶が三營の兵を率て朝鮮に行きたりとの噂もあり、鉄道は間平より芦台に増設することに決し、

敷木も売れ、仏人某は支那頑固者流の自大自尊の鼻を挫き文明の悟を開かしめんか為めなるへし、紫竹林墓地前に軍用鉄路を布き敷木を要せざる者運転の試験をなし、其妙用を感せしめ、而る後売込まんとその巧みなり。其の考の大なることは日本人に思ひ寄らぬなり。清国は益々力を尽して鉄道を開くに至るべし。先づ芦台より太沽、太沽より天津より通州及北京、又天津より山海関に通する目論見もある様子なり。武備堂新築、煥輪中堂臨験し生徒は已に徒れり。又博學館として洋務者を造出せんとその目的にて、天文地理、測量、機器、軍械、理学を修めしける由。此れは海軍の助けにもなさんとの見込なるべし。当地半年許りも居らざる内に、新造美麗の家一教家も出来、追々駸々と盛大に赴く景況なり。